

2025年3月31日

自己点検・評価室

【授業評価】

本プログラムにおいては、学生の理解促進に向けた取り組みが着実に進められている。具体的には、小テストやレポートに対する丁寧なフィードバック、授業中の質疑応答を通じて、学生の疑問をその場で解消し、学習内容の定着を図っている。また、IR 室主導の授業アンケートにより、学生の満足度や理解度が把握され、教育改善に活用されている点も評価できる。特にビジネス実務学科や美術学科においては、教員の授業方針が学生に伝わり、履修動機につながったと考えられる。

【課題】

一方で、数学やデータに苦手意識を持つ学生への対応が今後の課題として浮き彫りとなった。令和6年度以降の必修化により、全学生が履修対象となるが、特に幼児教育学科においては学生の評価が全科目平均を下回っており、保育現場との関連性をより明確にする工夫が求められる。また、必修化したことによって、学生の意欲を引き出す仕組みの整備や、個別対応・補習の充実が不可欠である。

【提言】

今後は、全学的な支援体制の強化に加え、授業内容においても学生の将来の進路を見据えた実践的な事例の導入が望まれる。今以上に地元企業や行政との連携を強化したPBLの導入や、卒業生の進路調査を通じた教育内容の最適化を進めるべきである。また、履修成果を可視化し、学生のモチベーションを高めるために、オープンバッジ等の外部認証を導入し、学びの成果を対外的にも評価可能な形で示す仕組みを検討されたい。さらに、学びの意義や楽しさを体感できる授業設計に努め、学生が「使える知識」として本プログラムを位置づけられるよう、教員の創意工夫が求められる。教育の質向上のため、継続的な授業改善と支援体制の拡充に取り組んでいただきたい。